虹彩の眼

油田敦彦

圓熟する王國の思想は樹木の午睡と蕩蕩として金色の睡眠が運行する絶對の大理石に蒼白の恥辱の窓を描く　その糾う海の竪琴のように廣大なる風景　泡立つ視線は莊嚴なる水平線の襞を轉って超然と夕暮の空気の兩の肩に降り注ぐ　祭壇のように堅固な花籠の皮膚は天體の倦怠が炸裂する鏡の指先に依って爬虫類の記憶に殘る靜かな綿雲を溶解する神の胸部に鏤める　沈黙の黄昏と蝉のような螺旋の塔は傷心の廢墟のように岩礁に堆積する　透明なる花の溜息は神秘の峽弯を揺る　磔刑の寶物の發芽深淵なる白無垢には一人の巫女が存在する　黄金色の階段を駆け降りて天秤の優美の眞珠貝に遭遇する　天空の顱顱を羽毛のように打ちふるわせて落葉樹の煌く時計の微睡は波の靜かな太陽の瞼に接近する　月影の睫毛は鮮明なる虹彩のように星辰の熱風の中を飛翔する　天鵞絨の照射が純粋の島に辿りつく　その精巧なる無限の震動蝶の輪郭はその凍るような豊饒の虐殺の逞しい觸覺に琥珀色の帆船を發見する　皮膚は髪の鐘乳石に觸れる　葡

荷房の苦悩が鳥類の心臓を四裂きの紅玉の魅力に曳航する　雷鳴のような瞬時の花瓣の圓運動を透視する　美少女の頭上に舞い上がる蜘蛛の朝は楽器を抱く掌の遺跡であった　それは間断なく虚空へと落ちて行く盲目の分裂繁殖であった　圓形劇場は野獣の巣籠る微量の瞑想を切断する　そこから熱帯性の幽霊が漏映する　それは地平線上で火花のように消滅する　しかし孤獨は雷鳴のようには鳴かない　椶梠の葉は臨髓の扉のように微ぐ　詩人の湖畔はエゼキエル幻視を呈する　紛糾の無秩序は大地の生ぶ毛の薔薇色の秘密である　霊魂は睡蓮のように體験する　おそらくおそらく太陽の種子は黄色の果實を妙齢の雷鈴のように祝福する　金属の聴覚は鷲の分水嶺から白鳥の遊星までの距離に輪舞の獅子と邂逅する　創造は地中に睡る水銀のように光束を放出する　龍の錬金術は液状の天國に現存する　蓮池の精霊は星の沈澱物を視覚の熱風のように摩擦する　圓積法の肖像は人工的に分離される　個性は稲妻のように萬物を模倣する　その兩性具有者　沸騰する指間は葡萄酒の沈黙のなかで生命の樹を蘇生する　鴕鳥の嘴が虹の鏡像を創造するなら兩極性の天體は春の葉緑素を呼吸する　漆黒の思籠は緑玉板

の融解に相似する　雷鳴は正五角形の春のなかで貝殻の礼拝を約束する　全ては人體の精緻な森林の鍵を貯蔵する　硫黄の光輪が鳩の三位一體を六芒星形定規面に産み落す　奇態なるその翼の焔　液體は卵の境界線上で白色化する　無意識に奔走する球體の馬は皿の眼球に翡翠の屍骸を刺繍する　惑星の薔薇園は優しい聖霊の血液の植民を愛する　森羅萬象の地中海沿岸では黄金の圓柱の影を服用する昆虫が熟睡する　微量の音楽から羅針盤の古代史までの麒麟の頸を遊歩する　砂漠の空瓶は登山家の内耳に瞑想の妖精を放牧する　青藍色の音響が卵殻の水平線で起る　寶物の爆發　晴天の柘榴は毛細血管の地球儀のように墜落する　それは永遠の白鳥が熱湯の純粋のように露の瞳孔を製造する時刻である　空のように猛然と寝床の波打際に飛びかかる不可思議は爪の火花のような香水を莢豆の風景のなかで描く　海は類同物の鼓動のように進化する　その全景は幽霊が手術室の夢に進化したのと同様優雅で難解なる形態の月夜であった　誇大妄想狂は気象學の色彩のように孵化する　王冠のように思考する　爆發する　美しい卵の痕跡はいま覺醒状態の病気の白霧のように直立する　磁石の密猟者は右手に奇蹟

の美神を抱く　眼球の翼に塗られた太陽の花粉は南極の時計のように哭く　瀝青の重力は虹色の胸のような絶品である　それは蠟の秤器のように變態する　午前五時の雨極ある水平線に挨拶する　縞瑪瑙の心臓の瀑布を無數の金魚が落下する　水晶の血液は白梅の夜明けであった月光が永遠の霧の視線のように迸しる肉焼けの蝶番いの化石は現実の湖水の留針の傳説を誘惑する　無人島の幻は電燈の嘴のように白砂に舞い上がる　空の紫陽花は聖母受胎を告地する　それは果實の輪郭を夢想する盲目の鍍金細工師であった　循環する炎の苦悩は聖水の振子装置に寶石細工の鯉魚を受信する　眞珠の形をした一匹の昆虫は砂時計の火花を放出する　習慣は碧玉の構造を持つ重複の水平線の蔓延である　その薔薇十字よ！